

「叫、让」と「せる、させる」のずれ

張 志 軍

0. 始めに

1. 「叫、让」の意義範疇とその用法及び構文上の特徴

1. 1 「叫、让」の意義範疇とその用法

1. 2 「叫、让」の構文上の特徴

1. 3 「叫、让」と「令」

2. 「せる、させる」の意義範疇とその用法及び構文上の特徴

2. 1 「せる、させる」の意義範疇とその用法

2. 2 「せる、させる」の構文上の特徴

2. 3 「せる、させる」で処理できない表現

3. A式使役構文と勧告文

3. 1 「せる、させる」に対応できない表現

3. 2 勧告文

4. おわりに

0. 始めに

「叫、让」は現代中国語では使用頻度が高い。これに対応する日本語の表現としては「せる、させる」を用いるのが一般的である。しかし、翻訳作品などを見るかぎり、「叫、让」は必ずしも「せる、させる」に対応していないケースが多い。本稿は従来の先行研究を踏えて、「叫、让」と「せる、させる」の本質を究明し、その用法上の“ずれ”を明らかにすることを目的とする。

1. 「叫、让」の意義範疇とその用法及び構文上の特徴

1. 1 「叫、让」の意義範疇とその用法

「叫」は「叫ぶ」「声をかける」「呼ぶ」及び「～するようにしむける」などの意義範疇を持つ語である。「～するようにしむける」という使役の意味を表わす場合は、それが兼語式の第一動詞として用いられ、表現としてはいま一つ動詞がなければならないという制約がある。使役表現の「叫」には「～するように言いつける」という意味が含まれている。この点において、「叫」は動詞プロパーとして用いられる場合と使役動詞として用いられる場合の意味上の共通項を見い出すことができる。

一方、「让」も使役以外に「譲る」「人に勧める」「脇へ避ける」「譲り渡す」などの意義範疇をもつ語である。現代中国語の語用論から言って、使役の用法に限って言えば、「叫」と「让」には基本的に差はない。

もっとも、本来は「让」，「叫」は英語の「let」，「make」に対応しており、現実の言語行動の上では、その痕跡は部分的に残ってはいる。

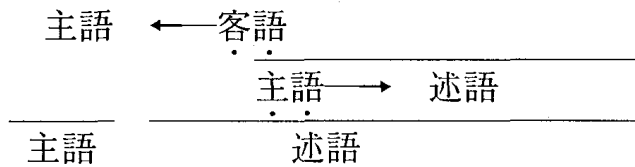
「叫」，「让」が使役表現に用いられる場合の構文は、「兼語式」と一般に言われている。呂叔湘は《汉语八百词》で、この兼語式について次のように述べている¹⁾。

「这个类型的句子里的谓语由一前一后两个动词中间夹着一个名词组成，这

个名词，既是前一个动词的宾语，又象是后一个动词的主语，所以称为兼语。」

呂叔淑の記述を図で示すと以下のようなになる。

主語＋叫／让＋兼語＋動詞＋その他の要素



(以下、説明上の便宜のため、主語、兼語をそれぞれ N_1 , N_2 とし、「叫、让」、動詞を V_1 , V_2 で示すこととする。)

まず「叫、让」を用いた兼語式の表現例を見てみよう。

- (1) 要是平日，王德一定绕过李应的背后，悄悄用手盖上李应的眼，叫他猜是谁，直到李应猜急了，才放手。 老舍《老张的哲学》

(それが平素だったら、きっと王徳は距離をとって、李応の背後へ回り、こっそり、手で李応に眼隠しをして、誰であるかを当てさせ、李応が当てられずにじりじりするのを見極めて、やっと手を放す寸法なのだが…)

石田達条雄・吴绵季訳

- (2) 开始，我在每一页书中间撒上一撮青稞，我自己翻书让毛驴吃。……《阿凡提的故事》

(最初は、本のページごとに一つまみの裸麦を挟んでおいて、わしが本をめくっては口バに食わせていたんだが…)

孙宗光訳

- (3) “阿凡提” 国王问道：“我想叫老百姓人人都富裕起来，你看我需要采取哪些明智的措施？” (同上)

(「アフアンティー、わしは下々に豊かな暮らしをさせたいと思っているのだが、どんな賢明な手を打てばいいのかな」と王様が尋ねました。)

- (4) 老张不能不叫李应走，他也不能来跟我闹。

(張君とて、李応を出さないわけにはゆかぬだろうし、わしに向かって馬鹿な騒ぎも持ち込んではこまい。)

同(1)

- (5) 小张怕你不知道，让我告诉你一声。

(張君は君が知らないのでは気をもんで僕に一声かけるようにと言った)

のだ。)

《汉语八百词》

以上の表現例(1)～(5)は表現形式は変わらないが、意味上多少のずれがある。

(1)は N_1 が N_2 に行動をとるように言いつける意が強く、(3)は N_2 に対する希望が顕著に現われており、(2)(4)は N_1 が N_2 の行動を許す態度を表わしている。(5)は N_1 が N_2 に対する命令を間接話法で表現している。

1. 2 「叫、让」の構文上の特徴

「叫、让」は兼語式の第一動詞であり、第一動詞の動作主は全文の主語である。第二動詞の動作主は第一動詞の客語である。使役の意志は N_1 によって実行され、実際の行動は N_2 によって遂行される。つまり、 V_1 と V_2 はそれぞれの動作主の意志によるものであり、相対的に独自性をもっている。 N_2 は N_1 の使役の意志に従って行動する場合もあるし、 N_1 の意志に背いて行動しない場合もある。次の表現例を見てみよう。

(6) “哈哈，叫你扫杏叶，你偷吃我的杏子。”

(ハッハッ！ アンズの落ち葉を掃けと言った筈だが、実を盗んで食ったなあ)

同(1)

(7) 不叫他去，他偏偏要去。

同(5)

(行くなと言って、彼になんとしても行かずにはすまない。)

これらの表現例から分かるように、 N_2 は N_1 の意志に背いている。しかし、 N_1 の意志に従うか背くかは「叫、让」の構文だけでは明確には表わせず、後続の表現に依拠しなければならない。従って、「叫、让」の構文だけではいくつかの状況設定が可能である。例えば、次の①～④がそれである。

- ① N_1 の使役の意志は N_1 の願望である。
- ② N_1 の使役の意志は N_2 に伝えたが、 N_2 はまだ行動していない。
- ③ N_1 は N_2 に意志を伝えたが、 N_2 は実行しない。
- ④ N_2 は N_1 の言う通りに行動した。

前述の表現例で言えば、(1)(2)は④の状況、(3)は①の状況、(5)は②の状況、(6)(7)は③の状況である。(4)は一般には①の状況であろうが N_1 の行為は希望

ではなく、可能性を表現しているので、無理がある。しかし、 N_1 の行為が未然状況であるという点で共通項がある。

しかし、状況の如何にかかわらず、「叫、让」兼語文の表現の力点は N_1 の行為にあることに変わりはない。

この点について、G. E ヤーホントフの《中国語動詞の研究》に次のような指摘が見える。²⁾

「強制の意味を有する動詞に支配される動詞は文法的に一定の形をとらない場合…依頼，勧告，禁止，委託などを意味するだけで，実際に遂行された動作は意味しない。」

この記述は、「叫、让」兼語文は N_1 の行為だけが強調されており、 N_2 の行動は取り上げないと理解してさしつかえなからう。

1. 3 「叫、让」と「令」

岩田憲幸は《使、令と使役構文》の中で古代漢語の「使、令」によって形成される使役構文をA式とB式の二種類に分け、A式は元の動詞の意味で用いられるものであるのに対して、B式は使役のマーカとして用いられるものである。と指摘している。

この指摘は「叫、让」と「せる、させる」のずれを解明していく上で、極めて有用である。

A式とB式の違いを見てみよう。

「令」を用いたA、B式構文は、現代中国語における兼語式構文と全く同じである。A式の「令」は V_1 で、「命令する」である。B式の「令」は単に使役のマーカとしての機能を果しているのみである。

A式構文は N_1 が N_2 に対し、 V_2 で示される行為をするよう働きかけることを表わし、 N_1 と N_2 には人或いは人に相当するものが要求される。B式は N_1 が原因となって、 N_2 に V_2 が示す状態が変化としてひきおこされることを表わす。A・B式の最大の相違点はA式の V_2 が主体の意志にかかわる行為であるのに対して、B式の V_2 の示すものは N_2 におこった非意志的な変

化の状態であることである。従って、A式のV₂は未実現の場合も、既実現の場合も可能であるが、B式のV₂の表わす状態は既実現に限られる。

B式の使役文は原因格使役文であり、本稿での分析の対象とするものではない。

ここで、A式構文の表現例を二、三取り上げて分析してみる。

(8) 翩翩乃翦叶为驴，令三人跨之以归。

(翩翩はそこで葉を切って驢馬にし、三人をそれに乗って帰らせた。)清・《聊斋志异》

(9) 贾珍令贾蓉次日换了吉服，领凭回来。

(贾珍は贾蓉に翌日、礼服に着換え、辞令を受け取ってくるように命じた。)清・《红楼梦》

(10) 可巧这日代儒有事回家，只留下一句七言对联，令学生对了明日再来上书。

(同上)

(ちょうどその日、賈代儒は用事で家に帰らなければならなくなったので、七言の対聯の一句を残し、学生にその対句を作って、翌日また塾に来るように言いつけ…)

この三例はいずれもN₁がN₂に自分の命令を伝えるものである。(8)はN₂がN₁の命令に従い、行為を実行している。(9)(10)はN₂の行為については言及していない。ここまでの分析によってA式構文に用いられる「令」は「命令した」という行動だけ表わし、その結果、命令した行為が実現されたか否かについては関与しないという特徴を見てとることができる。

岩田は文の最後に「古代漢語では、文言白話を問わず、A式、B式とも広く用いられたのに、現代語ではB式のみになり、なぜA式はすたれてしまったのかという疑問が残される」と述べている。

「令」を用いるA式使役構文は現代中国語から姿を消しているが、A式の表現が全くなくなってしまったわけではない。「叫、让」を用いる使役構文が見事にA式の役割を果しているのである。「叫、让」は「令」の化身とでも言うのであろうか。

次の表現例を見てみよう。

- (11) 吉冈让我挑选。 爱新觉罗《我的前半生》
(吉岡が私に選べと言った。) 丸山昇訳
- (12) 他们叫我上来的。 鲁迅《理水》
(みんなが私に行けって申しますんで) 竹内好訳
- (13) 见王德进来微微抬起头让王德坐下。
(王徳が入ってくるのを見ると、わずかに頭をもたげて、腰かけるよう
椅子をすすめ…) 同(1)

これらの表現はA式使役構文の特徴を百パーセント反映している。(12)において、N₂の行動は実現しているにもかかわらず、命令形の間接話法で対応されているのは、原文の重点が誰かが指示したことにあり、行動をとった結果にはないことをよく現している。

2. 「せる、させる」の意義範疇とその用法及び構文上の特徴

2. 1 「せる、させる」の意義範疇とその用法

「せる、させる」は一般に助動詞とし、「～をするようにしむける」の意を表わすとされている。さらに「せる、させる」には「～をすることを許す」の意も表わすとされてきた。

また、「せる、させる」の機能について一般に次のように言われている。

日本語には「開く・開ける」、「落ちる・落とす」など自動詞と他動詞が対になっている有対動詞が多く存在するが、例えば、「滑る」「発展する」「実現する」など自動詞があっても他動詞がないものもある。そこで「せる、させる」はこれらの自動詞を助けて他動詞の役割を果そうとするのである。次の表現例を見てみよう。

- (14) 太郎が足をすべらせて転んだ。
- (15) 日本側は…日中国交正常化を実現させることをはかる旨を重ねて表明する。

表現例(15)の「実現する」は「せる」を附加することによって、他動詞の役割を果たすことができるようになる。(14)も「すべる」に「せる」を附加して他動詞化している。多少協道にそれるが、ここで「足を滑らせる」は「足が滑べる」とどのような相違が存在するのかの問題は残されている。足を滑るようにするというようなことがないかぎり、他動詞性が生きて来ないことは言うまでもない。しかし、この問題は本稿の分析の対象からはそれるので、これ以上言及はしない。

なお、「せる、させる」の強制と許容の表現例を挙げておく。

- (16) 平仮名の表からお、ぜ、り、ん、た、ろ、うの文字を拾って練習させたのだが、かろうじて読める字は「り」と「ろ」と「う」で他は判じ物のような字なのだった。
- (17) 両親は子供たちに洋服を買わせた。

2. 2 「せる、させる」の構文上の特徴

「せる、させる」は使役文の中では助動詞として用いられている。

生成文法論者は、使役文にはもう一つの補文が埋め込まれていると主張する。例えば、「私は彼に本を読ませる」という表現には、「彼が本を読む」という補文が埋め込まれているとするのである。この補文は中国語の兼語式構文に対応させると正にその述語部分に相当する。しかし、この補文は使役文にそのまま埋め込まれるものではなく、補文の動詞は主文の使役動詞と直結している。

「読ませる」はあくまでも一つの語として機能し、 N_1 と N_2 の行動はすべてこの一語によって表現されている。テンスも動詞と一体となっている助動詞「せる」の語尾変化によって表わされる。「る」で終る場合は予定または意志を表わし、「た」で終る場合は、完了や過去を表わすこととなる。

表現例(15)で「実現させる」の形になっているのは将来の目標としてあげているからである。(16)の「練習させた」は「た」の形をとっているので、 N_1 の意志は N_2 に伝えられたことになる。「かろうじて読める字は…字なのだった

た」の表現から N_2 は N_1 の指示通りに練習したものであることがわかる。つまり、「させた」の形は N_1 と N_2 の行為がいずれも完了したことを意味している。

2. 3 「せる、させる」で処理できない表現

④ 指示する内容が未来のこの場合

「せる、させる」では N_1 と N_2 の行動が常に一致することが求められる。 N_1 が N_2 にやってほしいと思うことが将来のこの場合、 N_1 と N_2 の行動が一致することはありえない。この場合は「せる、させる」の形で表現することはできない。

例えば、母親が息子に翌日来てほしいと思う場合に、息子に自分の願望を伝えたとする。この場合、「母親は太郎に明日来させた」は明らかに非文である。母親が息子に伝える発話時点において、太郎の行動は未然であるため、「た」が使えないのである。「る」も母親の行為は未然であるのでやはり非文となる。従って、この場合は「せる、させる」の形を用いることができなく、「母親は太郎に明日来るように言った」或は「太郎は母親に明日来るように言われた」という表現となる。

次の表現例の場合も、 N_1 が N_2 にしてほしいこと、やらせたいことが未来のことであることによって、「せる、させる」が使えない。

(18) 医者は季節の変わり目が終るまでは自宅に戻らぬよう命じていたので…

(19) 明日の朝、出頭するように申してあるそうです。

石川達三《転落の詩集》

ここまでの分析によって、 N_1 が已然形で N_2 が未然の場合は、「せる、させる」の形では、処理できないことが明らかとなった。

⑤ N_2 が N_1 の意志に背く場合

「せる、させる」構文の特徴は N_1 と N_2 の行動が同一テンスであることが要求されることは既に明らかとなった。しかし、 N_2 と N_1 とが同一のテンスであっても「せる、させる」を用いることのできない場合がある。それは

N₂の行動がN₁の指示に背いた場合である。

例えば、次の表現例は明らかに非文である。

「母親は太郎に来させたが、太郎は来なかった」

「来させた」には、太郎の行動がN₁の希望通りだったことを含意しており、後半の「来なかった」と矛盾するからである。次の表現例は「せる」で表現することはできるが、状況は少し違っている。

「母親は太郎に来させようとしたが、太郎は来なかった」

この表現は母親が直接太郎に指示を下した場合もあるが、間接的に自分の願望を知らせた場合も考えられる。

いずれにしても、N₁がN₂に指示を出したとしても、N₂がN₁の希望通りに行動を起さない場合は「せる、させる」は用いられにくい。

さらに、次の表現例を見てみよう。

(20) 光子さんが「今年早く行こう」と勧めても、久夫さんに「こんな寒い時期に行くことはない」と言われ、実現しなかった。 『読売新聞』

これは直接話法で、N₁がN₂に指示を出したものの、N₂の反対で実行しなかった事実を表現している。仮りにこれを間接表現に変換すると次のようになる。

「光子さんは久夫さんに今年早く行くように勧めたが、こんな寒い時期に行くことはないと言われ、実現しなかった。」

これを中国語で表現すると、やはり「叫、让」を用いた以下のような表現になる。

「光子让久夫今年早点去，但久夫说：何必这么冷的时候去，结果没有成行。」

3. A式使役構文と勧告文

前述の通り「令」を用いたA式使役構文は現代中国語においては、「叫、让」を用いた兼語式文に生まれ変わっている。

従って、「叫、让」を用いた構文が「せる、させる」に対応しない時は、A式構文に遭遇したものと考えればよい。

3. 1 日本語の使役文に訳せない要素

④ 兼語連動文

中国語の表現には、一文に二つ以上の動詞が共起する表現が多いが、それには、兼語式動詞文の外に、連動（式動詞）文がある。呂叔湘の《汉语八百词》に連動文について、次のように述べている³⁾。

「连动句——这个类型的句子里的谓语动词不是一个而是几个。但是这几个动词之间不是并列关系而是连续关系」

「叫、让」兼語文にこの連動文が組み込まれると兼語連動入れ子型文となる⁴⁾。

まず連動文の例を見てみよう。

① 先把问题调查清楚，再研究解决的方法。

（まず問題をはっきりさせてから、解決の方法を考える）

② 等伤好了之后，再回部队。

（傷がすっかりよくなってから部隊に戻る）

この二つの表現はいずれも V_1 が先ず遂行され、その後で V_2 が遂行されることを表わしている。前後の関連はこの場合、「先…再」と「…后再…」によって明確に表わされている。ここで「再」は近い未来のことを表わしており、表現の内容は已然ではなく、未然のことである。この二つの連動文を兼語式文の述語に埋め込むと次のようになる。

(21) 他让我先把问题调查清楚，再研究解决的办法。

（彼は私にまず問題をはっきりさせてから解決方法を考えるように言った）

(22) 他让小李等伤好了之后，再回部队。

（彼は李さんに傷がすっかりよくなってから部隊に戻るように命じた。）

このように未然の事柄を表わす連動文を兼語式文の述語に埋め込むとA式

構文になり、「せる、させる」を用いることはできなくなる。

連動文には、関連を表示する呼応の形式がよく用いられる。「…完再」の外に「一…就」「先…然后」などの形式がある。

「一…就」は未然、既然のいずれをも表わすことができる。表現の最後に「了」があれば、既然の事実、なければ未然と見てさしつかえない。「先…然后」も同様である。次の表現例において、N₂の行動は未然である。

(23) 我让他一到北京就给我来信。

(私は彼に北京に着いてからすぐ手紙をくれるように言った)

(24) 老师让我们先读课文，然后练习会话。

(先生は私たちにまず課文を朗読し、それから会話をするように言った)

⑧ 假定条件文

中国語の假定文は通常「如果…就」「要是…就」という呼応関係によって表わされる。しかし、situation や context の支持を得て、その関係の暗示されることもしばしばある。假定を表わす接続詞である「如果」「要是」などもしばしば省略される。

次に、以下のような假定文を兼語式文に埋め込むとどうなるであろうか。

① 要是看见《中日辞典》替我买一本。

② 如果听到消息，我马上报告。

(25) 他让我看见《中日辞典》替他买一本。

(彼は私に『中日辞典』を見つけたら、一冊買ってくるように言った。)

(26) 田中让中村听到消息马上报告。

(田中さんは中村さんにニュースが耳に入ったらすぐに報告するように言った。)

この場合、N₂の行動は条件が実現した場合のことであるから、過去や完了を表わす使役文は適用されない。しかし、N₁の指示はすでに出ているわけであるから、「た」が用いられている。

◎ 命令形を述語部分にあてる場合

中国語の命令文は表現形式の上では通常の陳述文と差はない。兼語式の述

語部分に埋め込む場合もそのままの形である。それは他の兼語式表現の述語部分と同一ではあるが、附加成分が少なく、簡潔である。次の表現例を見よう。

(27) 父亲叫他出去！

(父は彼に出て行けと怒鳴った)

(28) 他叫我不要乱放炮！

(彼は私にアジるなと言った)

上記の兼語式文は命令文の間接話法である。表現の中心的内容は命令であり、その結果ではない。従って、勿論のことながら、使役表現は適用されない。

以上は形の上で違いこそあれ、本質は同じである。すなわち、述語部分の N_2 の行動はいずれも未実現である。

A式構文が、特に取り立てているのは V_1 の実現であり、 V_2 の実現ではない。従って「叫、让」を用いる兼語式文はB式構文だけでなく、A式構文も含まれている。

一方、「せる、させる」を用いた使役文の意味や用法は「叫、让」を用いた兼語式文の一部と重なっているので、「叫、让」に対応する日本語の表現として取り上げられてきている。しかし、ここまでの分析で、明らかであるように、A式構文の典型的な表現は「せる、させる」に対応させることはできないのである。むしろ、A式構文に対応する日本語の表現は勧告文が最も近いのである。

3. 2 勧告文

日本語の勧告文とは直接の命令文を間接話法によって表現するものを指す。

表現形式の上では、次の表現例のように、「命令形」を「ように」に変換すればよい。

ア. 父が僕に「お前が庭を掃け」と命令した。

イ. 父が僕に庭を掃くようにと命令した。

勧告文については次のような柴谷方良の指摘がある⁵⁾

「勧告文の主文動詞は『命令する』『勧める』『命じる』といった勧告動詞でなければならない。…『言う』『話す』は普通動詞としても勧告動詞としても働くので、普通の間接話法文にも、勧告文にも起り得る」

勧告文は命令文の間接話法であることによって表現の力点は当然「命令」にあり、そのことはA式構文の特徴と全く一致するのである。

以上の分析から「叫、让」を用いた兼語式文の一部は勧告文としてよい。その場合の「叫、让」は「言う、話す」に相当する。日本語における「言う」が勧告動詞として用いられる場合は「命令する」「勧める」を表わすのと同様に、「叫、让」にも「命令」や丁寧表現の「請」が含まれているのである。

4. おわりに

「叫、让」と「せる、させる」の用法上の“ずれ”について、以上の考察で明らかになったと思われる。本来、「叫、让」を用いる二重兼語式の日本語の対応についても取り上げたかったが、考察はまだ不十分なため、本稿で述べるができなかった。それを今後の課題としたい。

注

- 1) 呂叔湘『現代汉语八百词』1980, 商务印书馆 p. 18
- 2) C. E ヤーホントフ著, 橋本万太郎訳『中国語動詞の研究』1986, 白帝社, p. 75
- 3) 同1)
- 4) “把连动和兼语先后交错运用, 这叫连动兼语套用式, 又叫连动兼语交错式。”
高更生編『現代汉语资料选编』下册 1984, 山东教育出版社, p. 409
- 5) 柴谷方良『日本語の分析』1978, 大修館書店, p. 89

参考文献

- 呂叔湘『現代汉语八百词』1980 商务印书馆
高更生主編『現代汉语资料分题选编』1984, 山东教育出版社
望月八十吉著『中国語と日本語』1971, 光生館
藤堂明保・相原茂『新訂中国語概論』1984, 大修館書店
岩田憲幸「“使”、“令”と使役構文」1983「中国語学」230号

「叫、让」と「せる、させる」のずれ

- 岩田憲幸「使役兼語式のカテゴリー」1983『外国語・外国文学研究』7号
杨凯荣『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』1989, くろしお出版
井上和子『変形文法と日本語』1976, 大修館書店
柴谷方良『日本語の分析』1978, 大修館書店
岩波講座『日本語6文法I』1976, 岩波書店
C. E ヤーホントフ著, 橋本万太郎訳『中国語動詞の研究』1986, 白帝社